

幻のリシュリュー城

阿 河 雄二郎

リシュリュー城はあまり知られていないが、ルイ13世の首席大臣リシュリュー(1585-1642)が父祖伝来の地である西フランス・ポワトゥ地方のリシュリューに1630年代に建設した壮麗な城館であった。「であった」と過去形にしたのは、その遺構が今日ほとんど残っていないからである。フォンテーヌブロー宮とリュクサンブール宮を手本とし、のちのヴォー・ル・ヴィコント城やヴェルサイユ宮に影響を与えたといわれるこの城の遺構で目につくのは入城門(portail)、厩舎の一部、果樹園、地下倉庫ぐらいで、方形の城館跡地を取り巻く濠に橋がかかっている。もっとも、この城のすぐ近くには、ほぼ同時に着工された都市(=日本風にいえば「城下町」)がひっそりと佇んでいる。人口約2000人の小さなこの町が興味深いのは、アンリシュモン(財政長官シュリーの城下町)、シャルルヴィル(ゴンザーグ公の城下町)と並ぶ初期的な計画都市だったからで、周囲に濠をめぐらせ、城壁に囲まれた南北約700メートル、東西約500メートルの長方形の輪郭や、そのなかに立ち並ぶ住居群、碁盤目状の街路が往時の姿を偲ばせる。

1624年に首席大臣となったりシュリューは、父や兄の代に他人の手に渡っていたリシュリュー城とそれに付属する所領を競売で買い戻したばかりで、当初は城に少々手を加える程度にとどめようとした。しかし、1630年のジュルネ・デ・デュブ(=「裏切られた者たちの事件」)の陰謀事件を巧みに切りぬけ、ルイ13世から絶大な信任を得て「公爵(duc et pair)」の称号の内示を受けると、彼は公爵家にふさわしい城館を所有する必要性に迫られた。城に併設される町についても、彼は、城壁と濠で囲われ、週2回の定期市開催の特権を与えられた都市建設を王から認められたが、その費用は三年間公費で賄われた。王の最大級の恩恵である。辛辣な批評家はリシュリューを次のように嘲笑した。「リシュリュー〔フランス語で「豊かな土地」の意味〕の地は反語的にそう名付けられたのである。土地はとても貧しく不毛である。城の建設前は沼地にすぎなかったので、私がポワティエの人頭税徴収官から聞いたところでは、税を払えないほどに住民は貧しく、20年このかたこの教区では人頭税が徴収されたことがなかった」。

そうした批判を受け流し、リシュリユーは大枚をはたいて近隣の所領を買いあさり、地価100万リーヴルの大所領を築きあげるとともに、パリから著名な建築家ルメルシエを呼び寄せ、本格的な城と町づくりに着手した。城が完工したのは彼が亡くなる1642年の前後で、彼自身は1632-33年頃に2、3度訪れたばかりで、結局、この城の雄姿を見ることはなかった。なお、17世紀中葉のリシュリユー城（図1）と町（図2）の威容を、ジャン・マロの図版で確認していただきたい。

政治的に多忙をきわめたりシュリユーが主に住んでいたのは、パリのルーヴル宮の真向いのパレ・カルディナル（現在のパレ・ロワイヤル）とパリ西郊のリュエイユ城（現在のマルメゾン）だった。バーギンの研究によれば、彼が一代で築き上げた財産は2500万リーヴルにのぼるが（17世紀ではマザランの3500万リーヴルに次いで第二位）、彼が亡くなったとき、パレ・カルディナルは建物内の家具調度品ともどもルイ13世に献呈された。予想される王側の汚職摘発に対して先手を打ったのであろう。その際、彼が収集していた膨大な文書、書籍、美術工芸品の類も、多くは王とソルボンヌに引き渡され、今日ではルーヴル美術館、国立図書館、ソルボンヌ大学図書館を代表する宝物となっている。

問題は、リシュリユー亡きあとのリシュリユー城と町の命運である。生前に居住しなかったとはいえ、リシュリユーがこの城と町の造営にかけた情熱はかなりなもので、現場監督にあたったスルディ枢機卿（ボルドー大司教）のもとには、建物、庭園、装飾物についての指示があとを絶たなかった。町のメインストリート（Grande rue）に向かい合って合計28の館が計画されたが、パリから遠い片田舎のこととて、ここに住もうと名乗り出た人は少なかった。それでも最終的に、財政長官デムリー、國務卿シャヴィニイを筆頭に、ラ・バジニエール、ダグソー、ゲネゴー、ル・カミュといった錚々たるフィナンシエが館を構えたのは、阿諛追従とはいえ、当時の「保護＝被保護」の主従関係（clientèle）のさまをまざまざと見せつける。逆説的ながら、何ごとにも目ざといフィナンシエがこの町に見切りをつけるのも早かった。

リシュリユーの死後、公爵家を継承したのは、彼の姪エギヨン公夫人（1604-75）の親族で、歴代リシュリユー公を称した。そのうち、彼の曾孫の代にあたる第三代ルイ＝フランソワ＝アルノー・ド・ヴィニユロ（1696-1788）はルイ15世の寵臣として権勢をふるい、18世紀中葉には城と庭園をヴェルサイユやマルリーに匹敵するほど美しく飾り立てた。その反動であろうか、第五代アルマン＝エマニュエル（1766-1821、ルイ18世時代の外相）はフランス革命が勃発したときロシアに滞在していたため「亡命者（émigré）」の烙印を押され、城を含めて全財産が没収された。ようやく城がリシュリユー家に戻ったのは1805年であるが、革命期に城の荒廃は相当に進んでいたようで

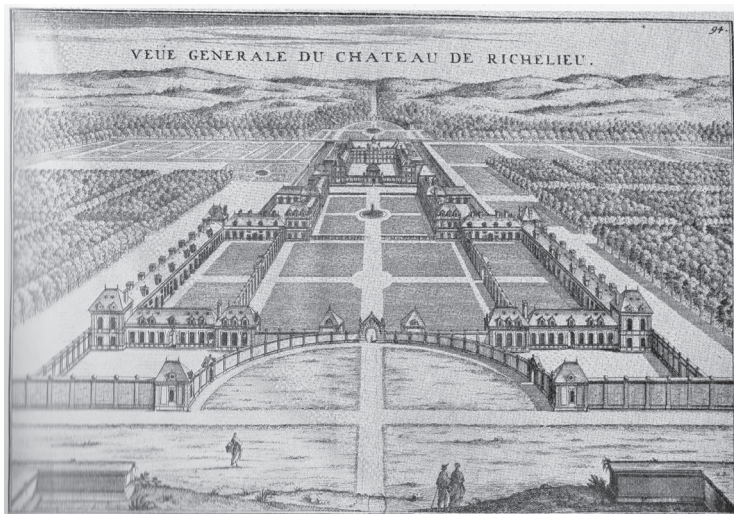


図1 17世紀中葉のリシュリュー城（マロの図版による）

（出典）L.Réau, *Les monuments détruits de l'art française*, 2vol., Paris, 1959, t-II, p.41.

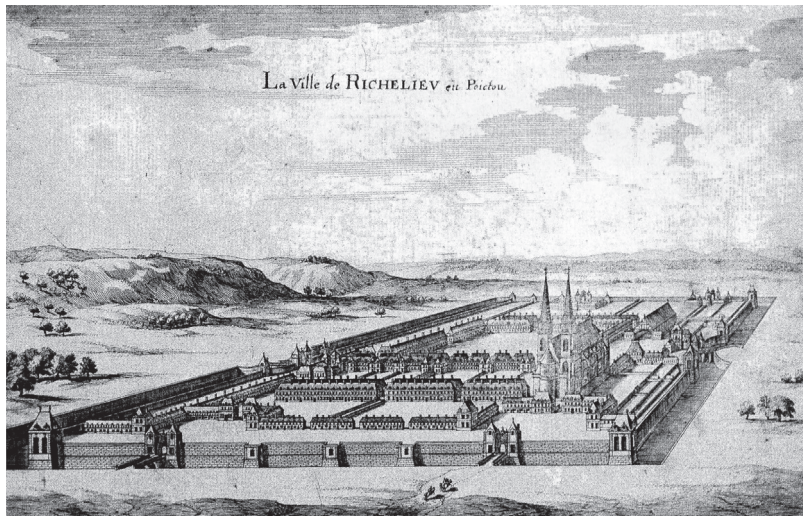


図2 17世紀中葉のリシュリュー市（マロの図版による）

（出典）*La légende de Richelieu*, Paris, 2008, p.261.

ある。城の維持ができなくなったアルマン＝エマニュエルの子孫は、リシュリユーが城内に残していた美術品をあらかじめ売り尽くし、1832年には城自体を不動産業者のブルトンに売却した。こともあろうに、ブルトンは城の建築用材をすべて売り払ったので、城はすぐさま地上から姿を消してしまったのである。このあたりの情景は、ロワール峡谷を舞台にバルザックが描く小説に登場する没落貴族と新興の成り上がり者の関係を彷彿とさせる。ようやく1877年、城のあった区域はリシュリユー家の親族によって買い戻され、1930年には最後の第八代リシュリユー公がソルボンヌ大学に寄贈して今日に至っている。元来リシュリユーとソルボンヌは深い絆で結ばれていたもので、城の跡地がソルボンヌの所有に帰したのは自然の流れといってよいかもしれない。

もうひとつ関心をそそられるのは、リシュリユー城に所蔵されていた美術品の行方である。稀代の収集家であるリシュリユーが、ローマ、フィレンツェ、イスタンブールなどに駐在する外交官、貿易商人、考証家に命じて古書や美術工芸品を集めたのは周知のエピソードであるが、彼はこの城の装飾のために貴重な美術品を惜しげもなく投入した。ちなみに200体はあったと想定される彫刻の代表格は、現在ルーヴル美術館にあるミケランジェロ作の「反抗する奴隷」と「死に瀕した奴隷」で、1632年の反乱で処刑されたモンモランシー公家からの贈物だが、城の本館正面2階バルコニーに無造作に置かれていたという。ほかにも「ヴィーナスとキューピッド」「ゲルマニクス」「アポロン」「バックス」などは古代ギリシア・ローマ時代の逸品で、今日いずれもルーヴル美術館で展示されている。

一方、250点以上にのぼる絵画は、リシュリユーがイタリアのエステ家に受け継がれていたコレクションをマントヴァのゴンザーグ公を介して購入したのが出発点となり、ファン・アイク、マンテーニャ、コスタ、カラヴァッジオ、ヴェーエ、プーサン、プレヴォなどの作品が招来された。絵画部門で注目すべきは、第一に、1627年（「レ島におけるイギリス軍の敗退」）から1636年（「コルビーの占領」）まで、リシュリユーがルイ13世とともに歩んでフランスに勝利をもたらした戦争の数々が20枚もの連作大画（プレヴォ作ともいわれる）となって描かれていることである。大作が展示されたのは、長さ70メートル、幅10メートル、高さ8メートルの城内2階の大回廊（Galerie）で、そのうち12枚がヴェルサイユ城美術館に現存している。これらの絵画は、ルイ14世の栄光を称え、表象するヴェルサイユの「鏡の間」の図像の原型と考えて間違いはない。

第二は、ルイ13世の妃アンヌ・ドートリッシュに捧げられた「王妃の間」を飾っていたドリュエ作の「4大元素（土、水、空気、火）」（図3を参照）と、礼拝堂用に注文されたフレミエ作の「4人の福音書作者」と「4人の教父」の位置付けである。後者は



図3 ドリユエ「四大元素」のうち「水」(オルレアン美術館で筆者撮影)

もちろん宗教的な意味をもつが、前者は過剰なまでの寓意に満ち溢れ、リシュリユーの王家への変わらぬ忠誠と、彼が王家と不可分一体であることを暗示したものと解釈されている。そういえば、彼のコレクションにはルイ13世の立像(ポワティエ美術館)や幼いルイ14世(オルレアン美術館)など王家の人々の肖像が多い。こうした肖像作品は単なる観賞用ではなく、それに付随した何か儀礼めいたプラチックの存在を感じさせる。このような忠誠心を前にすると、ルイ13世もリシュリユー家の存続に気配りせざるをえなかっただろう。

一時的に散逸し、数奇な運命をたどったリシュリユー城の財宝は、その後、公的機関によってかなり回収され、現在ではルーヴル美術館をはじめ、トゥール、ポワティエ、ヴァンドームなど地方の美術館で観賞できるようになった。とくにオルレアン美術館が前述したドリユエ、フレミエ、プレヴォなどの名品を所蔵しているのは、オルレアンの貿易商人だったビルテ＝グルネが購入・私蔵していた約30点を1824年に美術館に寄贈したからである。もっとも、建設当初からリシュリユー城・町とその収蔵品は有名だったので、見学に訪れる文化人、建築家、美術愛好家は多く、その目録がマロ、ベレル、ヴィニエなどによる図版集やカタログとして後世に伝えられていた。こうした文字史料や図像史料をもとに、今日ではかつてのリシュリユー城のありさまをCGでリアルに再現できるまでになった。町おこしの一環であろうが、リシュリユー

市の資料館（エスパス・リシュリユー）ではこのビジュアル映像が楽しめる。幻のリシュリユー城が蘇ったのである。この最新の技術をふまえて、リシュリユー研究も新たな地平が切り拓かれていくに違いない。

（主な参考文献）

E.Bonnaffé, *Recherches sur les collections de Richelieu*, Paris, 1883.

L.Battifol, *Autour de Richelieu*, Paris, 1937.

J.Bergin, *Cardinal Richelieu; power and the pursuit of wealth*, Yale UP, 1985.

R.Mousnier (éd.), *Richelieu et la culture*, Paris, 1987.

M.-P. Terrien, *Richelieu, le château et la cité idéale*, Cholet, 2005.

M.-P. Terrien et P.Dien, *Le château de Richelieu, 17e-18e siècles*, Rennes, 2009.

吉田伸之・高澤紀恵他編『伝統都市を比較する——飯田とシャルルヴィル』山川出版社、2011年。